会員のひろば

北海道医報では、特定の個人・団体を誹謗、中傷する内容等を除いた幅広い多様性のあるご意見を掲載させていただいております。

アルバイト

札幌市医師会
宮の森記念病院
真崎（まさき）　茂法（しげのり）

医学生の時、ローソンでアルバイトをしていた。学生時代の大半をローソンで過ごしたと言っても過言ではない。たいてい月15回以上、多いときは月28回出勤したこともあった。当時の日中の時給は575円、夜で730円であった。最初は17時から22時までの勤務で、アルバイトの先輩の高校生から仕事を教えてもらった。５時間勤務して、もらえるのは3,000円弱であり、お金を稼ぐのは簡単ではないんだな、と感じたのを覚えている。仕事を覚えてからは深夜の１人勤務に入るようになった。主に22時から翌８時までの深夜勤務に週３回入り、その他、日勤、夕勤、準夜とさまざまな時間の勤務に入っていた（**写真**）。当時は若かったので週３回徹夜の勤務をしても問題なかったが、さすがに深夜勤務明けの翌日の授業は居眠りをしていたかもしれない。

ローソンのアルバイトで最も助かったのは賞味期限切れの弁当をもらえたことである。学生時代の私はローソンの賞味期限切れの弁当で育ったと言えるほどである。とは言え、売れ残って賞味期限切れとなる弁当はたいてい見た目も地味なものが多く、デラックスな弁当ではなかったように思う。たまにカルビ焼肉弁当のような売れ筋の弁当が当たったときには今日はなんてラッキーなんだ、と喜んだものだった。それでもどんな弁当でももらえた弁当は嬉しく、たくさんもらえた時は冷凍しておき、あとで食べていた。

自分はローソン店員になるためにこの地に来たのだ、と勘違いするくらいに医学生の本分を忘れてローソンバイトに明け暮れた日々を送っていた。それはローソンバイトが楽しかったことに他ならないが、ときには楽しいばかりではなく、困難な場面にも遭遇した。勤務していたローソンは幹線道路に面しており、暴走する改造車が夜な夜な出没し休憩がてらローソンに駐車するのである。車のマフラーの爆音で近隣住民から「お前のところの車がうるさいぞ！なんとかしろ！」と苦情を受けたことがたびたびあった。駐車中の車に「近隣の方から苦情が来ておりますのでお静かにお願いします」と注意すると「なんだよ、お前。俺ら客だぞ？」とすごまれたこともあった。クレームに対する対処の必要性とその難しさを学ばせてもらったのは貴重な経験だった。

自分を雇ってくれたローソンのオーナーには公私ともにお世話になり、卒後も時間があったときにはローソンのオーナーを訪ねては、私はローソンの制服に袖を通し、たびたびレジに立っていた。卒後しばらくは学生時代の経験でローソンの業務をこなすことができていたが、年数が経つにつれ支払い方法や各種チケットの発券など業務が多様化し、だんだんと私はローソン店員として使い物にならなくなっていった。10年程前にオーナーがローソンの仕事を勇退され、このとき私のローソン店員としてのキャリアも終わりを告げた。

ローソンでのアルバイトは、社会を知らなかった未熟な自分にお金を稼ぐことの大変さやクレームへの対応の難しさなど、さまざまなことを教えてくれた。それらの学びは医師として働いてからも糧となっている。ローソンの青い光を見るたびに当時を思い出す。またあのローソンの青いストライプの制服に袖を通しレジに立ってみたいな、と思いながら、社会人としての初心を忘れずに日々の診療にあたっていきたいと思う今日この頃である。

写真

マツユキソウは待雪、松雪？

札幌市医師会
札幌清田病院
後藤　義朗（ごとう　よしろう）

「題名のない音楽会」（北海道Ｒ６／12／８放送）のゲストは、2021年ショパン国際ピアノコンクールで１位を取ったピアニストのブルース・リウだ。披露曲はチャイコフスキー「四季」－12の性格的描写の中から、６月「舟歌」と４月「松雪草」の副題が付く。前者の「舟歌」は聞き覚えがある。船遊びするような心地よく軽快な曲だ。ショパンやフォーレにも舟歌があるが、舟歌と聞くと筆者は八代亜紀の『舟唄』をしみじみと思い出してしまう。さて、後者の松雪草とは、どんな花なのであろう。読みは同じ「待雪草」なら、スノードロップの和名として記憶していたのだが。題名をYouTubeで確認すると、確かにピアノ曲は「松雪草」と掲げている。でも、辞書で調べるとgoo辞書は待雪草（「待」と略）のみで、松雪草（「松」と略）はない。Weblioは「待」も「松」もあり、また、季語辞典[1)]には春の季語で「松」として記載されている。蔵書の植物専用の雑誌では「待」[3)]で、一方歳時記では「松」を使うので[4)]、芸術関係で多用されているのかもしれない。

Wikipediaのスノードロップの項を見ると「待」を充てている。ヒガンバナ科で、学名は Galanthus nivalis。Galaはギリシャ語でミルク、anthusは花で、nivalisは雪を意味する。「松」か「待」かの定義は、学名からは推察できない。またスノードロップのドロップは垂れて咲く、あるいは雫のようなという表現も併せている。高さ15～25cmで、釣り鐘状に白い花を下向きに付ける早春の花だ。外は大きな三弁、内側に三弁ある。明治時代の初めに日本に渡来して和名は、雪の中の寒さにも負けず、最後の雪を「待って」春一番に咲く花を表現した[2)]。つまり、植物学では、「待」が正字なのだ。

一方、スノードロップは、聖燭祭（２月２日）と関係が深い。カトリック教会の祝日で、イエスキリスト生誕40日でマリアとヨゼフがエルサレムの神殿につれていった日なのだが、この花を集め家に持ち帰ると家が清められるという。また、禁断の実を食べたアダムとイブが、楽園を追いやられ雪の中を歩いていると哀れに思った天使が雪に息を吹きかけた。その雪が地に落ちて咲いた花で、もうすぐ春がくるからと伝えたとも言われる。（別名春告草といわれる所以でもある）

ロシアの詩人マルシャークが『森は生きている』[5)]の中でこの花をテーマにした。主人公の少女が大晦日に継母からスノードロップを探すようにと吹雪の森に追いやられる。訳者の湯浅芳子は子供の読者のためにマツユキソウとカタカナで記した。初版は1953年で約70年前だが、「待」と「松」には結論が出ていない。なお。物語はスロバキアの伝説に基づく、ロシアのシンデレラストリーである。女王が、大晦日に冬に４月に咲くマツユキソウを見たいから、篭一杯の花を摘んできた者に金貨とギンギツネのシューバ（外套）を与えるという御触れを出す。吹雪の森に追いやれた娘は12人の各月の精（原題が『十二月』）が集まっていた場所にたどり着く。話を聞いた「１月の精」は心打たれ、「４月の精」に１時間だけ場所を譲ることを他の精に了解を得た。季節は急に春となってスノードロップが咲き、娘が手にすることができた。

では、「松」の由来は？　松は常（トコ）しえの緑を保ち、冬でも存在する。生命力の強さや長寿であるので、神聖で縁起のよい植物だ。年末の飾る松は、神の依代（ヨリシロ）となるので、年神様をお迎えするお正月飾りにも用いられるが、門松の松は神を「待つ」、あるいは、祀（マツ）るという意味も含まれる[6)]。従って、マツユキソウの「松」には、福以外に年神様の降臨を「待つ」意味も重ねた可能性がある。縁起を大切にする音楽や俳句などの芸術の分野ではそこに重きを置いたかもしれない。

スノードロップは薬剤の観点からも注目される。その根に含まれるアルカロイドの一部はガランタミンとして精製され（学名ガランサス由来か？）。現在アルツハイマー型認知症（AD）の進行抑制に用いられる（Wikipedia）。人生の「秋」とも言われる初老期から発生するから他人事ではない。認知症への効果は神様の救いの手でもあろう。ADの方が希望を持ち新たな春を「待」つことができるのも、さらに季語のように「松」の永続性を願うことも、両者ともADの方には「福」に通じる。

今年はさっぽろ雪まつり後の大雪に見舞われた。12時間で積雪120センチを越えた帯広では雪害が大きかった。これが最終の雪で胸をなでおろした。筆者も人生の秋を迎えたが、誕生月でもある４月、その精がもたらす待雪草をこれからも待ち続けたい。

＜参考＞

１）松雪草（まつゆきそう／まつゆきさう）初春－季語と歳時記
２）スノードロップの花言葉｜名前の由来｜花言葉・誕生花｜HanaPrime（ハナプライム）
３）Fleur　週刊花百科　No. 97 講談社　Ｈ９／１月
４）草木花の歳時記　四季花ごよみ　講談社　1994
５）森は生きている　岩波少年文庫072　岩波書店　2000年
６）趣味どきっ！　開運！神秘のちから 縁起物“門松”（NHK　Ｅテレ　Ｒ６／12月）

だからチームで

美唄市医師会
美唄すずらんクリニック
福場（ふくば）　将太（しょうた）

私はできないことだらけの精神科医だ。持病の網膜色素変性症によって医学部在学中から徐々に視力が低下し、32歳でほぼ失明、44歳の現在はわずかに残った周辺視野で室内の明暗を感知できるのみである。よって、診察は患者の声を頼りに、文書の読み書きはパソコンの音声読み上げを頼りに行なえてはいるものの、注射や縫合などの手技はもちろん、画像の読影も不可能である。

2001年に法律上の欠格条項が一部緩和され、障害を持つ者も医師免許を取得できる道が生まれた。とはいえ臨床の現場に、目や耳が不自由な医者、手足が動かせない医者、幻聴症状を有する医者がいることは、事実存在はしているものの、まだまだ当たり前にはなっていない。その存在に疑問や不安を感じる声も聞こえてくるし、障害を持つ医者自身が自らの存在の是非に葛藤もしているに違いない。

今でこそこうやって視覚障害を開示している私だが、失明当時は毎朝玄関で気合いを入れなければ出勤できなかったし、今でも気を抜くと「自分がここにいない方が病院にとってもよいだろう」と、つい考えて落ち込んでしまうことがある。

障害を持つ医者の多くは、医師免許取得後に病気や事故に見舞われた者だ。だが2024年に公立校に限らず教育現場での合理的配慮が法律上の義務となり、今後は医学部に入学する時点から障害を持つ学生も存在し得る時代となった。教育に携わっている知人に話しを聞くと、例えば耳が不自由な医学生がいた場合、「聴診器が使えないということは医者としての能力を満たしていないのではないか」「現場に出て大丈夫なのか」という議論にどうしてもなりがちだという。

できないことがある医者がいることで医療の質が下がる、患者に危険が及ぶ。だからそのような医者は潔く臨床から去るべき……という理屈なのだろう。

ただそれは、医療の質を医者単体の能力で捉えてしまっていることによる見解だ。『チーム医療』という言葉を忘れてはいないか。学生でも知っている、医療はチームで行なうものだと。だから医者に障害があったとしても、チームとして医療の質が担保され、リスクが回避されていれば、それでよいのである。

私は、画像の読影が必要になれば同僚医師に依頼する。患者の容姿や表情の情報は、看護師や受付の事務員から提供してもらう。処方の内容は、間違いがないか復唱して確認する。手間を増やしているが、一方でそのことによって自然とスタッフとのコミュニケーション・意見交換が生まれ、丁寧なダブルチェックの習慣にもなっていると感じる。特に精神科は、多職種での話し合いが不可欠な医療。医者がワンマンになると支援が支配に暴走しかねない。視覚障害のおかげで、そのリスクが回避されているのは有難い。

私という医者単体では医療はできないが、チームの一員としてなら医療に貢献できる。情けないとは思わない。個人の技能がどうこうよりも、チームとしてちゃんと患者の回復に役立っていることが一番大切なのだから。

そしてこのチームにはもう一人、不可欠なメンバーがいる。それは患者自身。

患者は医療者に施されるだけの存在ではない。そうなることが余計に患者の孤独感・無力感を助長してしまう。

私が院内で迷っていると、手を引いて誘導してくれる患者がいる。診察の際、自ら聴診器の先を持って自分の腹部に当ててくれる患者がいる。そんな時、患者は普段見せない穏やかさや晴れやかさを見せてくれる。私がそうであるように、チームの一員として協力できることが患者も嬉しいのだろう。これもまた視覚障害のご利益に違いない。

最近、幼い頃に見た祖父の姿をよく思い出す。外科医であった祖父はひどいリウマチを患い、メスを持てなくなった後は看護師に車椅子を押してもらって病棟の回診をしていた。「先生、大丈夫ですか？」とベッドから患者が声を掛け、祖父はやや弱い笑みで患者を励まし、その身体に触れていた。

どうしてそこまでして医者の仕事を？　と当時は思っていたが、今ならわかる。若くて元気だった頃と比べたら能力は落ちてしまったかもしれないが、祖父は祖父にしかできない役割を果たし、チームとして医療は成立していたのだと。

オールマイティな技能で一人で何でもこなせる医者、それはもちろん一つの理想だ。しかし医者も人間、得手不得手があり、病気や事故、あるいは加齢によって能力を失うことは誰にでも起こりうる。そんな時に必要なのは、スタッフや患者との協力体制。医者単体では不完全でも、チームとして医療ができれば何の問題もない。けっして一人で働くわけではないのだから。

閉じかけた視野の中で光を見つけ、北海道に着任して十九年目。あたたかいチームメイトに恵まれて、どうにかここまで歩いてきた道。これからもみんなと歩いて行けることを心から願って。

駅弁のDNA

函館市医師会

水関（みずせき）　清（きよし）

駅弁にまつわるメモリアル・デーとして、４月10日と７月16日のふたつが知られている。

４月10日は、日本鉄道構内営業中央会が1993（平成５）年に定めた「駅弁の日」。その由来は、「弁当」の「とう」から数字の10を取り、「４」と「十」を組み合わせると「弁」という字に見えるから、とされている。７月16日の「駅弁記念日」は、国土交通省が2001（平成13）年に制定したもので、1885（明治18）年のこの日に、日本鉄道第二区線の宇都宮駅で日本初の駅弁が販売されたことにちなむ。また、1999（平成11）年のこの日に国土交通省設置法が交布されたため、同省が発足した2001（平成13）から、７月16日は「国土交通Day」として記念されている。

宇都宮で旅館を営んでいた白木屋の斉藤嘉平が売り出した、わが国で初の駅弁は、ごま塩をまぶした梅干し入りのおにぎり２個と沢庵２切れを竹の皮に包んだもので、価格５銭であったという。

その後、1889（明治22）年に姫路駅で登場した駅弁は、鯛の塩焼き・伊達巻き・焼き蒲鉾・出汁巻き卵・大豆昆布佃煮・栗きんとん・牛蒡煮つけ・甘炊きゆり根・薄味の蕗煮・奈良漬と梅干し・黒ごまをふった白飯からなり、今の「幕の内弁当」の原型が見てとれる。

一方、駅弁になくてはならぬお茶が販売されたのは明治20年代のこと。静岡駅の駅弁屋が信楽焼の土瓶にお茶を入れ、小さな湯のみを添えて販売したのが始まりとされている。

国鉄からJRが発足した当時、東海道新幹線の「こだま」が停車する各駅で駅弁を販売する業者に、販売価格900円の新作駅弁を競わせたことがある。「新幹線グルメ」と名づけた駅弁キャンペーンがそれである。

東海道新幹線（東京駅～新大阪駅）区間において、当時は「ひかり」に比べて利用が低迷していた「こだま」活性化プランの一環として、東京駅を除く停車駅12駅で、1987（昭和62）年11月20日、名古屋駅の２社を含む13社の調製元から新作駅弁が一斉に発売され、各停車駅と「こだま」車内で購入可能であった。

新横浜駅の「The横濱辨當」からはじまって、小田原駅「デラックス鯛めし」、熱海駅「早咲きの梅」、三島駅「天城の本わさびづくし海ひこ山ひこ」、静岡駅「茶めし弁当静岡めぐり」、浜松駅「喧嘩凧」、豊橋駅「手筒花火」、名古屋駅の「那古野づくし」と「トッピング・オムズ」、岐阜羽島駅「きのこ村」、米原駅「湖北のおはなし」、京都駅「精進弁当」、そして新大阪駅「御堂筋弁当」までの13駅弁である。このうち2024年まで、「喧嘩凧」「手筒花火」「湖北のおはなし」の３駅弁が残っていたが、2025年になって、「湖北のおはなし」を販売する井筒屋が、宮川亜子代表取締役名で「駅弁事業からの撤退の社告」をホームページ上に掲載したことで、駅弁ファンの間には衝撃が走った。以下に、その要旨を示す。

「弊社は安政元年（1854年）、長浜船着き場前にて旅籠「井筒屋」を創業し、明治22年、東海道線全通を見越し、交通の要衝となるべく米原へと拠点を移し、駅弁事業を営んでまいりました。旅のお供であるべき駅弁とは何か、その土地ならではの駅弁とはどういったものかを思い巡らせ「味をえらび　味をととのえ　味ひとすじに」納得いただける商品をお届けしたいと、日々励んでまいりました。しかしながら、昨今の食文化は娯楽化がもてはやされ、（中略）手抜えの文化も影を潜めつつあります。そのような環境に井筒屋のDNAを受け継いだ駅弁を残すべきではないと判断致しました。（以下、略）」

「井筒屋のDNA」とは、「味をえらび　味をととのえ」る「手抜えの文化」を意味するものであり、その実践例として販売したのが「湖北のおはなし」という名物駅弁であったろうことは、「新幹線グルメ」と名づけた13駅弁の中で残った３駅弁の一角を占めていたことからも明らかである。

筆者も、米原駅でこの駅弁を求めた一人である。竹すだれの容器に、地元名産である「鴨のロースト」を始めとする郷土料理が収められている。目を引くのは「おこんだて」という名の「お品書き」。以下に抄出する。

「賤ヶ岳の裾野を流れる小川の水が温む頃、琵琶湖から、いし貝、川えび、小鮎が水揚げされます。

このお弁当は、粒胡椒でローストした「鴨」が主役。大切な脇役には、すき焼き風にして胡麻をまぶした「かしわ」、甘辛く田舎風に炊き込んだ永源寺「蒟蒻」、卵焼き、葱とお揚げの「ぬた」、十五夜の味「小芋丸煮」、梅干しと山牛蒡の漬物、秋から冬にかけて、竹竿に干す「赤かぶら」。いずれも、滋賀の里の風物詩です。「白おこわ」は、下に敷いた桜の葉と一緒にお召し上がり下さい」

音もなく移ろいゆく四季ならではというコンセプトに沿った「白おこわ」には、山菜、枝豆、栗、黒豆が取り合されるために、筆者が購入したものは、冬バージョンの黒豆ご飯であった。

「お口直しには飴をどうぞ」として、中に醤油飴を入れて弁当箱の一角に置かれた「紙製のサイコロ」の目は『五』である。この「五の目のサイコロ」については、ドリアン・T・助川　著「駅弁ファナティック」（学陽書房　2001年）に優れた考察があるので、以下に抄出したい。

「米原で買った駅弁にはサイコロが付いていて／それは六がなく　一から五までのサイコロなのだけれど／それで十分だと思った／六は稼ぎ過ぎだからだ」

「すごろくは上がるに越したことはないが／／三つ進んで一つ下がり／四つ進んで一回休み／／もしもこのあやふやな日々がすごろくであるのなら／六を出してはいけない／出し抜いた気持になってはいけない」

「湖北のおはなし／このおはなしは老婆が幼子に与える知恵の物語だ／／知恵とはそういうもので／一人先を急ぐ知恵のことではない／旅人のおはなしはサイコロの先だ／それがどんなおはなしになったとしても／旅を続けることはできる」

魚釣り

上川北部医師会
しべつ耳鼻咽喉科あらかわクリニック
荒川（あらかわ）　卓哉（たくや）

高度経済成長末期、夕暮れ間近の川面を流れる毛ばり。切り立った川岸からは魚が見えるが一向に釣れる気配はない。見える魚は釣れないんだと親父の言葉が耳に蘇る一番古い釣りの記憶。

東北の地方都市、ご当地富士を望む大きな池のある市民憩いの公園。一角が釣り堀で、大人たちは静かに鮒釣りをしている。雑貨屋の店先にあるおもちゃのような竹の継竿に玉ウキと返しのついたままの釣り針一つ、バラケもなくタナを取ることも知らず頭上の枝に引っ掛けてばかり。暑い夏の日、あっちに魚がたくさんいるぞと近くの大人。なんでもその日魚を放流したのだとか、言われた方へ行って覗くと確かに魚が群れている。竿もなしに釣り糸を垂らすと、いとも簡単に次々釣れた。厄介払いされたのだと家族からは笑われた。

東北の中心都市、親父の故郷の郊外、屋敷林に囲まれた家が点在する海岸近くの田園地帯の小川、小鮒が入れ食いとなった。大人になってからもいくつもの記憶を重ねた大切な風景だった。でも2011年の大津波が海岸沿いの防風林を巨大なコンクリート防潮堤に変えてしまった。

東北の地方都市､市内中心部を流れる穏やかな川。放課後自転車を飛ばして、川面から頭を出している石がいつものポイント。町を離れて40年訪れる機会のなかったその場所に、当時の自分ぐらいの息子を連れて訪れたことがある。川面から頭をのぞかせる石まで同じ川の脇には、これも40年前そのままの釣具屋があり、安い竿を買って餌を流したら釣れた。

親父の渓流釣りにもたまに連れられて行くようになり何度目だっただろうか、言われるまま仕掛けを流していてまた川底に引っ掛けたと思い竿をシャクっていたら、横から手を掴まれて上げると釣れていた天然イワナ。釣ったとは言えない、きっと魚も納得できなかったろう。家に帰ってから親父がお袋の前で嬉しそうに､お前が一番大きいの釣ったよな､と。

親父の転勤で北関東へ。引越先は３県が接する県南の町。どうしてそこにたどり着いたのか、自転車をこいで県境のその気になれば飛び越せそうな小さな川。ぽつりぽつりと釣れるタナゴかと思うような小鮒。白い雲が浮かぶ夏の空からは雲雀の声が聞こえていた。

引越後も親父は渓流釣りに行っていたけれど、東北と違いほとんどの川は入漁料が必要で放流魚ばかりのようだった。その頃よく連れて行ってもらったのが江戸五街道杉並木の先の管理釣り場。川は落ち込みごとにゆるく区画が区切られていてそこでイワナやヤマメを釣るようになっていた。管理区域の下流には広いトロ場とさらに下ると砂防ダム、ここに魚が溜まっていた。管理区域の食いが鈍くなると独りで川を下っていった。たまに大人が一人二人いて子どもがくると迷惑そうな顔をされたが。その頃からもう40年以上。気になって調べてみると釣り場は今でも続いていた。

子どもの頃から憧れた氷上ワカサギ釣り、北の地で暮らすようになり実現した。原生林の谷間に広がる大きなダム湖、冬には２メートルの積雪とマイナス30度の厳寒地。ワカサギのほかにアメマス、サクラマス、そしてイトウ。外来魚の姿のないきれいな湖。頼めば離れた場所まで湖上をスノーモービルで送迎してくれる。あたり一面真っ白な湖上にバス停ならぬスノーモービル停が立っていて、帰りの時間を伝えて降ろしてもらう。岬の陰に入れば見渡す限り人影もなく、晴れていれば真っ青な空と真っ白な雪原、雪が降り始めるとすべてが白。聞こえるのはリールを巻く音とテントが時折風にはためく音、雪が降れば雪がサラサラと滑り落ちる音ぐらい。マス狙いの竿先の鈴が鳴るのを待つ静かな世界。

大人になるまで機会がなかったが、釣りの種類を選べば船釣りの敷居も高くないと知り、時折釣船に乗るようになった。川に連れてゆくには子どもたちはまだ小さく手巻きリールでカレイ釣り。遠ざかる陸地と水平線、船が立てる波しぶきに子どもたちは目を輝かせその横で３人分の竿を準備する自分は釣り場に着く頃には軽く船酔い。次々と上がる大小のカレイと歓声の横で自分は魚を外して餌をつけるの繰り返し。自分も少しは釣りたいと思う気持ちと魚の処理が頭をよぎりながらも幸せをかみしめる。船頭さんが撮った写真が釣り新聞に大きく掲載されていた。

北の海に向かう川の源流域、ヤマメとオショロコマの川。そこに住むのはもちろん魚だけではなく、そこは熊や鹿の住処でもあって、鹿が驚いて走り出す姿は美しいがまだ新しい熊の糞を見ると緊張する。２匹のスズメ蜂がずっと頭上を偵察しているのも怖い。胸丈ほどのフキやイラクサを踏み倒す音とクマよけの鈴の音のほかは川の流れと鳥の声、ときおり通り抜ける風にざわめく木々の音だけ。仕掛けを流せば魚たちがキラキラと竿先をふるわせる。そしてかつて親父がそうしたように、少し大きくなった息子を連れていく。

最近は釣りに出かける機会もほとんどないのですが、記憶の中の釣りを綴ってみました。いつまでも魚釣りのできる自然と平和が続くことを祈っています。

寿命の縮まった話

旭川市医師会
やまが整形外科クリニック
山賀（やまが）　慎一（しんいち）

私は令和５年に脳幹梗塞を発症してワレンベルグ症候群となり麻痺を生じたが、特に寿命は縮まっていないと思う。しかし、その前に寿命の縮まる思いをしていた。

それは令和４年の春３月の日差しの眩しい朝だった。妻が札幌に行くというので旭川駅まで送るはずだった。まだ出発の時間まで30分ほどあった。我が家には３匹の犬がいる。メスのビションフリーゼのみっちゃん、メスのボロニーズのべびちゃん、オスのミックスのコタローである。みっちゃんは散歩が大好きで、太陽の出ている明るい時間に私が家にいると、私の前に立ちはだかり散歩をせがむ。その日も私に付きまとい散歩を要求した。急げばみっちゃんを満足させられるだろうと考えた。保護犬で視力の弱いコタローは散歩に行きたがるくせに玄関を出てすぐ横になるので、胸の前で袋に入れて散歩していた（**写真１**）。その日は玄関内でコタローを袋に入れたままみっちゃんのモコモコした毛の中で首輪をはめて、少し時間を気にしながら家を出た。よく晴れていて道路脇の雪山は眩しく、対照的にタイヤの跡のわだちは雪解け水が黒く光り、足元はザクザクであった。左手でコタローを抱き右手にみっちゃんのリードを持って100m位歩いたところで、急にリードの緊張が無くなり、少し先を歩いていたみっちゃんが私に近づいて四つん這いになったかと思うと、突然向きを変えて背中を丸くして振り向きもせず全力で走って消えていった。私は驚いて走り出し、コタローと一緒にわだちの中に転倒した。「みっちゃん、みっちゃーん」と大声で叫んで右手を伸ばした。妻にすぐ連絡しようと思ったが、なんとその日に限ってケータイを持っていなかった。濡れた体でコタローを抱きながら息を切らせて走って自宅に戻り、札幌に行く準備をしていた妻に知らせた。妻はすぐに警察に電話して犬の特徴を聞かれ「中くらいの、耳だけ茶色の真っ白な犬」と伝えた。みっちゃんの耳はべびちゃんにいつも舐められて茶色に変色していた（**写真２**）。私たち夫婦は車と徒歩で手分けして逃げた方向の住宅街を探した。家の前で雪割をしている人々に聞いても見ていないと言われ泣きたくなった。１時間ほど探して、もうみっちゃんには二度と会えないかもという悲しい思いがよぎった。その時妻のケータイが鳴った。特徴の似ている犬が旭川東警察署という大きな警察署に連れてこられたという。すぐに急行した。生きているのか死んでいるのか聞きそびれていた。もしかしたら車に轢かれて死んでいるかもしれない。妻の不安を和らげようと、私は運転しながら、みっちゃんの脚がわだちの水で汚れて白黒になり「もしかしたらパトカーみたいに白黒になっているかもね」と軽口をたたいたら、すごい顔で睨まれた。不安いっぱいで警察に着くと、物品庫のような殺風景な部屋に案内された。死んで横たえられているかもしれない。ドアが開けられた。石油ストーブの近くの囲いの中にみっちゃんは立っていた。私たち夫婦の顔を見てすぐに尻尾を振った。私たちは泣いた。案内してくれた警察官の方に聞くと、逃げた場所から２kmほど離れた道路の青信号を、疲れた様子でトボトボ渡っていたところを、男性が抱きかかえ旭川東警察署まで届けてくれたらしい。名前を聞いたが男性は告げずに去ったという。保護された場所は逃げた方向とは逆方向であり、さらにそこに行くまでには「環状線」という大変交通量の多い道路を渡らなければならない。生きているのが奇跡に思えた。みっちゃんが潰れるくらいに強く抱きしめた。あの時は少し急いだり、きちんと確認しなかったり、ケータイを忘れたりと悪いことが重なった。最悪の事態から奇跡的に戻ってきたみっちゃん。以後、散歩の時は必ず２本のリードと首輪をしている。今思い出してもゾッとする犬好きの人になら分かってもらえる寿命の縮まる話であった。

写真１　当時の散歩のスタイル（真冬）

写真２　みっちゃん（左）とコタロー（右）

リングドクター

札幌市医師会
産科・婦人科ひなたクリニック
三橋（みつはし）　裕一（ゆういち）

みなさんこんにちは。ひなたクリニックの三橋です。

今日は、産婦人科の診療以外にライフワークとして活動しているリングドクターの話をしたいと思います。

リングドクターとは、ボクシング、総合格闘技など打撃系の試合で、リングサイドに待機しイベント（ダウン、出血など）が起こったとき試合続行できるかどうか判断する仕事です。

以前ダイエットで通っていたボクシングジムからお願いされたことがきっかけです。

本当は怪我をしないことが一番ですが、打撃で相手を倒す競技なので怪我は当然起こります。比較的、整形外科や脳神経外科のDr.がリングドクターになることが多いですが、怪我を治すわけではなく、あくまでも試合続行の可否を判断するためなので、産婦人科でも全く問題ありません。脱臼や骨折に対しての初期対応、脳振盪などに対するチェックなども必要であるため、整形外科的知識、脳神経外科的知識は勉強しました。

リングドクターの出番、その時は突然やってきます。

イベント発生→レフリーからアイコンタクト→スポットライトで照らされているリングに上がる→観客の視線が痛いほど感じる中、選手の状況把握→続行かドクターストップの判断

これを30秒、長くても１分以内で判断しなければなりません。当然、選手はアドレナリンが出ていて試合続行を希望します。

タイトルがかかった試合や人気の興行ほどドクターストップをかけると、ストップをかけられた選手サイドからの暴言、観客からのブーイングが起こります。無理して続行させた場合、選手生命にもかかわるため責任の重い仕事です。また一瞬で判断しなければならないため決断力も鍛えられました。

頭部打撃でのKOなどは試合後の脳のダメージが心配なので、神経学的チェック、その後24時間以内の注意事項のアドバイスも欠かせません。

１日で10～20試合が行われ、限られた時間の中での進行なので、ダウンされた選手のチェックを控室でしている最中にリングに呼び戻されることもあります。

このような緊張した中での仕事ですが、非常にやりがいを感じています。

ご縁があり、北海道初の女性プロボクサーのサポートもしました。これからもリングドクターとして選手のサポートをしていきたいと思います。

現在は日本スポーツ協会公認スポーツドクター資格を取得して、産婦人科医として女性アスリートの深刻な問題である、エネルギー不足、無月経、骨粗鬆症のサポートをしております。

全日本以上の国際大会で必須のドーピングに関する薬剤の情報提供も行っております。

何かお手伝いすることがあれば、お気軽にお声がけください。

※本稿は、札幌マタニティ・ウイメンズホスピタル発行の広報誌『MAMMY LIFE』（第119号）に掲載したものを一部修正いたしました。

撲朔謎離（ぼくさくめいり）

札幌市医師会
札幌いがらし人工関節クリニック
村上　俊也（むらかみ　としや）

中国の古詩「木蘭詩」は男装の女性戦士、木蘭（ムーラン）を称えたものだ。詩中の「撲朔謎離」とは、走る兎の姿から雌雄の判別はできないが、耳を掴んで持ち上げたとき、足をバタバタさせれば雄、目を細めてぼんやりすれば雌と区別ができるという意味らしい。徴兵される父親の代わりに男装して出兵し、匈奴相手に武功を挙げて帰国した娘が、元の姿に戻って人前に出ると周囲が驚いたという故事である。木蘭は実在した人物で遊牧民の鮮卑族（モンゴル系民族）だったらしいが、中国では漢人の英雄となっている。女性の男装、男性の女装だけなら、性の不一致とは言わないだろうが、真に心と身の性が一致しないもの、今風でいうLGBTは理解が難しい。今のところ遺伝子関与の示唆はないという。環境の関与もわからない。染色体異常が指摘されている半陰陽者や両性具有者とも異なる。卑近な例でいえば、観音様が女でも男でも中性でもなく性を超越した存在だという。女、男、中性という「性自認」は何の意味を成すのか。人の生き方は千差万別あってしかるべき。要諦は一個の人間としての基本的権利をどう擁護すべきかにある。日本を除くＧ７の６か国では同性カップルでも異性カップルでも同等の権利が法律で保障されているという。令和５年５月、名古屋地裁は同性婚を認めないのは憲法14条（法の下の平等）、同24条（婚姻の自由）に違反すると審判した。札幌地裁に続き２例目の判例となった。我が国の性同一性障害特例法によれば性別変更には５要件を満たす必要がある。それは①18歳以上、②現在結婚していない、③未成年の子がいない、④生殖不能要件（生殖能力がない）、⑤外観要件（変更する性の性器に似た外観）である。後者２項を手術要件と捉える。つまり性転換を合法的に認めるには、性転換手術が必要であった。しかし令和５年10月、最高裁が性別変更５要件のうち、生殖能力の放棄を求める「生殖不能要件」を違憲と判断した。乱暴な言い方をすれば、心が女性だと申告すれば、誰でも女性風呂や女性便所を利用できることになる。この判断が拙速かつ軽率であるかが、国会で話題となった。外国ではトランスジェンダーを口実にした猥褻事件が多く報告されている。レイ・ブランシャール（カナダ）らの提唱するオートガイネフィリア、つまり性自認は男性でありながら、女性化により性的快楽・興奮を得る人間たちを真のLGBTと区別できないことにある。ややこしい時代になった。男女の区別を前提にしてきた社会制度、慣習、スポーツ大会などはどうなるのだろう。子供の立場を代弁すれば、父が二人、母が二人では可哀そうだ。「男耕女織」、「良妻賢母」なる言葉も遺風となるのだろうか。再選された米国大統領トランプはこの１月20日、性別を男性と女性の二つのみとする大統領令に署名した。つまり性別は性自認ではなく生殖機能により区別すべきだとした。我々医師にとっても無関係な話ではない。

北海道医報「会員のひろば」投稿募集

◇情報広報部◇

北海道医報では、「会員のひろば」への投稿を募集しています。記事の内容は自由です。医療情勢、診療で日頃から感じること、趣味・紀行、エッセイ、自己紹介等でも可です。

１．記 事 制 限：１記事あたり１ページ以内。
２．文　字　数：600 ～ 1,000字（１段分）または1,600 ～ 2,000字程度（２段１ページ分）
　　※いずれも写真・図含まず。
３．掲　　載：掲載可否および掲載号は広報委員会にて決定します。
４．原稿送付先：ihou@m.doui.jp
５．問い合わせ先：011-231-7661（情報広報部）